千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

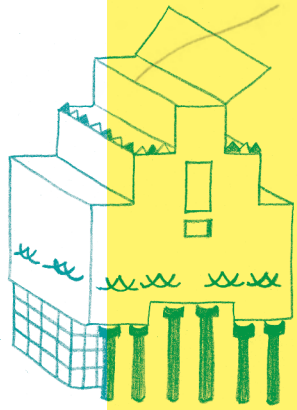
つくりかけラボ15
齋藤名穂｜空間をあむ
手ざわりハンティング
Tactile Hunt Weaving Space

会期
2024年
6月12日(水) – 9月29日(日)

アーティスト
齋藤名穂

テーマ
五感でたのしむ

概要
「つくりかけラボ」とは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間をつくり上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。
第15回は、建築家・デザイナーである齋藤名穂さんをお迎えしました。千葉市美術館という空間を往来する人びとの感情や感覚を指先からひらき、「さわる地図」が美術館と来館者をつなぎます。「さわる」を手がかりに来場者一人ひとりの美術館体験が紡がれていく空間となりました。



Art Lab 15

空間をあむ

手ざわりハンティング

齋藤名穂

Tactile Hunt Weaving Space

Nao Saito

Tactile Hunt Weaving Space

Nao Saito

つくりかけラボ

空間をあむ

手ざわりハンティング

つくりかけラボのお話をいただいた時「何でも好きなことをやってください」と合わせて、一緒にこのラボを作り上げた担当学芸員の山下彩華さんから、千葉市美術館の様々な機能を有機的に繋げていきたい、という思いを聞きました。企画展示室、常設展示室、びじゅつライブラリー、さや堂ホール、つくりかけラボ。確かに一来館者として私が美術館を訪れる時も、企画展を楽しく見てそのまま帰っていました。

私は展示デザインや建築空間の中の家具デザインとともに、ライフワークのように、見えない人と見える人が一緒によむ建築地図 ‘タクタイル・マップ’ を色々なミュージアムと作っています。このプロジェクトには、公共空間は隅々まで使われていて欲しいという気持ちがあります。そして公共空間を歩き出す時の相棒である地図もまた、使う人を限定せず、いつも使われていて欲しい。人が空気が、光が、淀みなく隅々まで動くこと――建築家もまた空間をデザインする時、そういう目に見えない流れを思い描いていると思います。

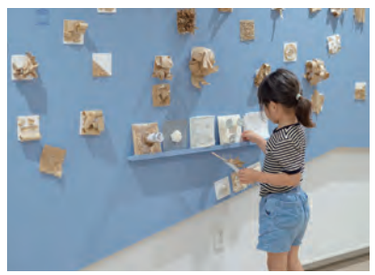
美術館全体の機能を有機的に繋げていく試み――今回は改めて「さわる」をキーワードにしようと思いました。身体を使って建築空間を歩き、作品が描く世界を歩き、手ざわりをハンティングする。その手ざわりをラボに持って帰ってきて、誰かに伝えるために‘さわるプレート’を制作する。さわるプレートがつくりかけラボの空間に増えていく。そうやって、たくさんの人が歩いたシークエンスを、縦糸と横糸のように編んだ面が、この夏の千葉市美術館のタクタイル・マップになる。――これは、今まで1人でやってきたデザインプロセスをみんなにひらく試みでもありました。

実際に蓋を開けてみると、人々の、手ざわりを作るクリエイティビティの高さに驚きました。そして小さな子供たちが、誰よりも真摯に指先に神経を集中させ、建物や素材を触ってみながら、とても詩的なプレートを作っていたことが印象的です。大きなテーブルを囲み、小さな人から大きな人までが、制作をしてそれについておしゃべりをするワークショップの時間は幸せな光景でした。また、見えない人と見える人のカップルが、まるで街を散策するように、ラボの青い壁に広がるさわるプレートを触りながら、おしゃべりをしていた様子を、後ろからこっそり見られたのもご褒美の時間でした。

建築空間の中に、アート作品の中に、手ざわりを発見するのは、自分がその空間を実感した瞬間なのかも。この夏たくさんの人と一緒にタクタイル・ハントをしてそう思いました。これは小さな頃から考えていた、世界をどうやって実感できるのかな、という問い掛けへのひとつの答えを見つけたようで、私にとっては大きな発見でした。

タクタイル・マップ、さわるコレクション、さわる絵本…と、デザイナーとしての私の、‘さわる’を切り口にしたデザインは広がっています。ラボを基地に、たくさんの実験ができたことは、これからのデザインの大きな糧となりました。

――― 齋藤名穂



01 02 03 04 05

01. 手ざわりのヒントはここに **02.** 一つの素材で多彩な手ざわりが生まれます **03.** つくったピースは壁面のマップへ **04.** 壁面のピースは自由にさわって「手ざわり」を共有します **05.** 4つのタクタイル・プレートをつなげて、物語を考えます

オープンワークショップ
Open Workshop

○手ざわりプレートをつくろう

会期中つねに開催／
参加者＝のべ1,755人

美術館に向かうまでの道のりから美術館で過ごす中で見つけた「手ざわり」をクラフト紙で表現し、壁面の「タクタイル・マップ」（＝手ざわりで描かれた千葉市美術館のマップ）のピースをつくりました。

○美術館の手ざわりから生まれる物語

会期中つねに開催／
参加者＝のべ26人

アーティストワークショップやスペシャルワークショップで生まれたタクタイルプレート(p.4)の手ざわりを楽しみ、「いつ」「どこで」「だれが」「何をした」をあらわす4つのプレートを選んで物語を創作しました。物語のテキストは物語カードに記入し、次の参加者が前の一文を読んで次の一文を考えます。そうして絵本の1ページをつくるように、物語が紡がれていきました。

アーティストワークショップ
Artist Workshop

美術館で見つけた「手ざわり」を、身近な素材を使ってプレートに表現するワークショップ。毎月テーマや素材を変えて開催しました。

7月 企画展示室編

開催日（参加人数）=
13日（10人）、14日①（13人）、14日②（10人）

①イントロダクション

まずはウォーミングアップ。名穂さんがこれまでに手がけた手ざわりのツールを使って、「さわる」ことによってもたらされる感覚や感情を言葉にしてみます。

②美術館の中で手ざわりハンティング

7月のテーマは「企画展示室の中の手ざわり」。展示室に移動して、みんなでじっくりと作品を鑑賞します。作品に描かれているものの手ざわりを想像しながら、手ざわりハンティング。

③素材の説明

つくりかけラボに戻ったら、表現する手ざわりにぴったりの素材を探します。選べる素材は3種類。「じっくりと感触に向き合うためには、素材は多くないほうがいいです。これはコミュニケーションのためのツールなので、“誰かに伝える”ことを意識しましょう。」名穂さんからアドバイスをもらいながら、真剣に素材を選びます。

④プレートづくり

選んだ素材を組み合わせて、イメージする「手ざわり」をプレートに表現していきます。スポンジを布の下に入れたり、素材を切る際にひと工夫することで、同じ素材でも全く異なる手ざわりが生まれました。

⑤リフレクションタイム

作品が出来上がったら、作品をみんなでさわって鑑賞します。どんなさわり心地なのか、どんなイメージがひろがったかを参加者みんなで共有しました。

⑥完成したものは展示台へ

完成した作品は、会期を通してつくりかけラボ内で展示されます。来場者がいつでもさわって楽しむことができ、オープンワークショップ（p.3）にも活用されました。

6月 建築編

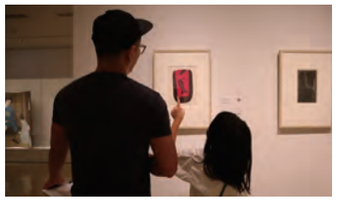
開催日（参加人数）=
15日（11人）、16日①（12人）、16日②（6人）

6月のテーマは「美術館のたてもの」。美術館の1階にあるさや堂ホールで手ざわりハンティング。さわることで、普段は気がつかなかった建物の装飾や肌触り、温度までも体感しました。

8月 常設展示室編

開催日（参加人数）=
21日（7人）、22日①（6人）、22日②（10人）

8月は5階の常設展示室で手ざわりハンティング。美術館所蔵の版画、日本画、浮世絵など、技法も時代も異なる作品には気になる手ざわりがたくさん隠れています。



スペシャルワークショップ
Special Workshop

開催日=6月22日、30日、7月24日（2回）、
8月3日、24日、9月1日（2回）
参加人数=115人

手ざわりプレートがつくれる立ち寄り式のワークショップを開催しました。さや堂ホール、図書室、展示室など複数のエリアから手ざわりハンティングの場所を選び、ワークシートを持って館内を探検。アーティストワークショップで使用する特別な素材を用いて手ざわりプレートを作りました。

関連ワークショップ+アーティストトーク

Weaving Tactile Gradation
手ざわりのグラデーションをあむ

8月6日（火）14:00～16:00
講師：アロナ・チジェンコ、大月ヒロ子、齋藤名穂
参加者：14人

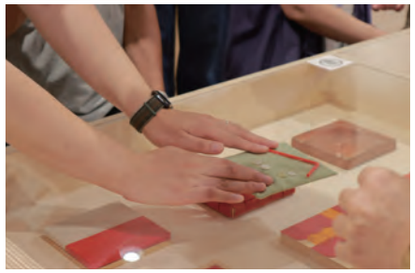
ウクライナ人作家のアロナさんとミュージアムエデュケーションプランナーの大月さんがそれぞれ提案する、空間やコンセプトにアプローチしたワークショップを開催。参加者は2つのワークショップを行き来しながら、今回のラボを構成する「手ざわり」や「“誰か”とのコミュニケーション」が相互に作用する創造的なプロセスを体験しました。

アーティストトーク

なおさんとおしゃべりしましょ！

9月14日（土）14:00～16:00
ゲスト：木内真由美（長野県伊那文化会館　学芸員）
参加者：10人

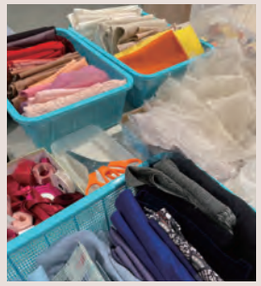
長野県立美術館で名穂さんと一緒に「インクルーシブ・プロジェクト」を手がけた木内さんをお招きし、今回のラボを振り返りました。美術館の建築空間がもたらす体験や、「さわる」という行為が持つ美術館における可能性など、興味深い話題が次々に展開しました。



齋藤名穂 公開制作

9月29日（日）11:00～
参加者：のべ135人

壁面のタクタイル・マップには名穂さんが見つけた美術館内の作品や建築模様などのモチーフが描き込まれました。さらに、3ヶ月半の間にオープンワークショップで集まったピースを整理しながら、一本の線をひき、タクタイル・マップが名穂さんの手で完成されました。また、展示台が全てつながれ、ラボの空間には二つの大きなタクタイル・マップが出現しました。



素材があつまるまで

会期以前より、会場付近に「素材ハンティングボックス」を設置。ボタンや布、リボンなど、アーティストワークショップ等で使用された身近な素材の多くは、来館者の皆さんにご提供いただきました。

空間が編まれるまで

空間設計から展示什器のデザインまで、すべて名穂さんによるものです。はじめはまっさらだったブルーの壁面も、日を追うごとに手ざわりのピースが増え、隙間がなくなるほど埋め尽くされました。

最初はまっさらな状態

ワークショップでつくられたタクタイル・プレートを展示する台は3種類の形があり、合計8台制作しました。誰もが展示されたプレートをじっくり見ることができる高さ、段ボールというリユースしやすい素材、展開することによって平らになる設計など、名穂さんのこだわりが詰まっています。単体でも、台をつなげても使用することができます。

公開制作後の最終日の状態

展示ケースの前の壁面には、タクタイル・プレートのアーカイブを展示しました。また、「手ざわりクイズ」のコーナーを壁面の一部に設けました。ここでは、手ざわりのピースが何の手ざわりを表現しているか自由に想像して楽しむことができます。

展示ケースは、普段は名穂さんがこれまでに手がけた「さわるツール」の展示台として、ワークショップ開催時は作業台として、二つの役目を果たしました。ワークショップでは布を被せ、参加者が台を囲むようにして座り、隣の人との心地の良い距離感があたたかな雰囲気をもたらしました。

企画の方向性が定まってきた頃、名穂さんが考えを整理し、文章にまとめたものを受け取りました。そこには、目の見えない友人との会話で得た気づき――「自分の身体が見つける小さな手触りや音をひとつひとつ集めながら彼の空間はできている」―― が、「さわる地図」シリーズを作り始めるきっかけとなったと記されていました。そして、名穂さんにとって、その繊細で美しい空間のイメージこそが、デザインの仕事をする上で思い描き、立ち上げたい風景なのだと。本プロジェクトを通じて生まれるその光景を、私も見てみたいと思いました。

名穂さんが長年取り組む「さわる地図」は、指先から伝わる感覚がもたらす感情や想像力をうながすものであり、それ自体が非常にクリエイティブなものです。しかし、名穂さんはこの「さわる地図」はコミュニケーションのためのツールだといいます。アーティストワークショップでは常に“だれかに伝える”ことを意識して制作され、表現することの先には必ず“他者”の存在がありました。この「さわる」ことで生まれるコミュニケーションは、年齢、国籍、性別、障がいの有無といった境界を軽やかに飛び越え、「私」と「あなた」をつなげていきました。

「美術館」はだれもが楽しむことができる空間であるはずですが、その「だれもが」にとりこぼされていると感じる人も多くいるのが現状です。そうした人をできる限り減らしていくことは美術館の課題でもありますが、今回のプロジェクトでいえば、他者との共感や共有の感覚および内省する時間を来場者ひとりひとりが持てるようなものであったと感じます。つまり、「〜のための」といった特定の誰かに向けた配慮を行うことなく、みんな同じ立場で自由に関わることができるものであったと思います。毎月行われたアーティストワークショップでは、約3.5mの長い机を取り囲むようにして12名ほどの参加者が席に着き、近すぎず遠すぎない距離感で大人も子どもも一緒になって制作を行いました。そこには、常に他者を感じながら個人が尊重される、そんなおだやかであたたかな空気が流れていました。

また、同ワークショップでは必ず参加者全員で館内をまわり、「手ざわり」を探す（ハンティングする）時間が設けられました。実際に触れることができない企画展示室や常設展示室の作品に対しては、作品に描かれた世界を触覚でなぞるように「眼でさわる」という実践が試みられ、美術館における「さわる」ことの多様なあり方が示されました。そうして、人々の動きは螺旋を描くようにゆるやかに館全体へと広がり、それは名穂さんが最終日に壁面のタクタイル・マップにひいた線に表れています。触覚を通じた創造的な対話である「さわる地図」は、つくりかけラボを越えて美術館という空間にさまざまなテクスチャーをもたらし、丁寧に空間を編んでいったのでした。

（千葉市美術館学芸員 山下彩華）

つくりかけラボ15
齋藤名穂｜空間をあむ
手ざわりハンティング
Tactile Hunt Weaving Space

会期
2024年6月12日(水)–9月29日(日)

主催
千葉市美術館

会場設計
齋藤名穂（UNI DESIGN）

会場施工
株式会社東京スタデオ

アーティスト滞在日
6月14日（金）、15日（土）、16日（日）、17日（月）、30日（日）
7月12日（金）、13日（土）、14日（日）、21日（日）
8月6日（火）、20日（火）、21日（水）、22日（木）、9月14日（土）、28日（土）、29日（日）

来場者数
5,951人
（大人4,502人、高校生以下1,449人）

「つくりかけラボ15
齋藤名穂｜空間をあむ
手ざわりハンティング
Tactile Hunt Weaving Space」報告書

執筆
齋藤名穂
山下彩華

撮影
大倉英揮（黒目写真館）
千葉市美術館 ※ •印の写真

デザイン
サイトヲヒデユキ（書肆サイコロ）

表紙フォーマット
加藤賢策（LABORATORIES）

印刷
株式会社エイチケイ グラフィックス

編集・発行
千葉市美術館

発行日
2025年3月31日